

2019 年度 数学基礎論サマースクール「選択公理と連続体仮説」
コーエンの強制法 第 2 回目 宿題

問題 半順序 \mathbb{C} を $\mathbb{C} = \bigcup_{n \in \omega} {}^n \omega, \leq_{\mathbb{C}} = \supseteq$ とし, ${}^\omega \mathbb{C}$ を \mathbb{C} の積半順序としま
す. このとき,

$\Vdash_{{}^\omega \mathbb{C}}$ “ $\check{\mathbb{R}}$ は可算集合である”

ことが成り立つことを示しましょう.

さらに, どの無限基数 κ に対しても

$\Vdash_{{}^\kappa \mathbb{C}}$ “ $\check{\mathbb{R}}$ は可算集合である”

ことも証明できます.

解答 この解答も、以下のような方法だけでなく、他の方法も考えられます。みなさんそれぞれの証明を考えてください。以下の証明で、「 ${}^\omega\{0,1\}$ と ${}^\omega\omega$ の間に全単射が存在する」ことに注意してください。その点をご勘弁を。

まず証明のための準備をします。いま、 $\bar{d} = \langle d(n) \mid n \in \omega \rangle$, 各 $d(n) : \omega \rightarrow \omega$ とします。 $\bar{d} \in {}^\omega({}^\omega\omega)$ です。このような \bar{d} と $j \in \omega$ に対して、 ${}^\omega\omega$ の元 $\langle a_k^{\bar{d},j} \mid k \in \omega \rangle$ を、 $k \in \omega$ に関する再帰により

$$a_0^{\bar{d},j} = d(0)(j),$$

$$a_{k+1}^{\bar{d},j} = d(k+1)(a_k^{\bar{d},j})$$

と定義し、さらに、各 $k \in \omega$ に対して

$$b_k^{\bar{d},j} = a_k^{\bar{d},j} \bmod 2,$$

$$X(\bar{d}) = \left\{ \langle b_k^{\bar{d},j} \mid k \in \omega \rangle \mid j \in \omega \right\}$$

と定義します。 $X(\bar{d})$ は ${}^\omega\{0,1\}$ の可算部分集合です。

以下、 $\mathbb{P} = {}^\omega\mathbb{C}$ とします。 \mathbb{P} -name \dot{x} と \dot{y} に対して、

$$\text{up}(\dot{x}, \dot{y}) = \{ \langle \dot{x}, \mathbb{1}_{\mathbb{P}} \rangle, \langle \dot{y}, \mathbb{1}_{\mathbb{P}} \rangle \},$$

$$\text{op}(\dot{x}, \dot{y}) = \text{up}(\text{up}(\dot{x}, \dot{x}), \text{up}(\dot{x}, \dot{y}))$$

でした。各 $n \in \omega$ に対して、次のように定義します。

$$\dot{c}_n = \{ \langle \text{op}(\check{\xi}, \check{\eta}), p \rangle \mid p \in \mathbb{P} \wedge \langle \xi, \eta \rangle \in p(n) \}.$$

このとき、

$$\Vdash_{\mathbb{P}} ({}^\omega\{0,1\}) \subseteq X(\langle \dot{c}_n \mid n \in \omega \rangle),$$

つまり、どの $f \in {}^\omega\{0,1\}$ とどの $p \in \mathbb{P}$ に対しても、 $q \leq_{\mathbb{P}} p$ を満たすある $q \in \mathbb{P}$ とある $j \in \omega$ に対して、次が成り立ちます。

$$q \Vdash_{\mathbb{P}} \check{f} = \langle b_k^{\langle \dot{c}_n \mid n \in \omega \rangle, j} \mid k \in \omega \rangle.$$

最後のステップを示します。 $f \in {}^\omega\{0,1\}$ と $p \in \mathbb{P}$ が与えられたとき、 q を $q \leq_{\mathbb{P}} p$ と次を満たすように構成すれば良いです。

$$q(0)(\text{dom}(p(0))) = 2 \text{dom}(p(1)) + f(0) \text{ (これを } b^0 \text{ と書く)},$$

$$q(k+1)(b^k) = 2 \text{dom}(p(k+2)) + f(k+1) \text{ (これを } b^{k+1} \text{ と書く)}.$$